慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米山桂三先生を偲ぶ
Sub Title	
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.3 (1980. 3) ,p.171- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	米山桂三先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800315-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

た年、法学部助手に任用された。先生が五〇代にはいられた頃である。その年、先生の推薦と当時の奥井塾長の命令で、他学部四名の専任者とともにハーバード大学ビジネス・スクールに派遣された。そのとき、先生は、私に二つの研究課題を与えられた。第一は、産業社会学からみた経営管理教育の日本での在り方と、第二は、ハーバード大学での文化人類学および応用人類学の現状を研究してくることであった。日本での経営管理教育が萌芽期にあった頃である。

考えてみると、先生との出会いは、私にとって運命的なものであった。三〇年以前、先生に初めてお会いしてから、私の人生は先生の強い磁力と磁場のもとで展開してきたように思う。先生は一言でいって、非常に鋭い時代の観察者であった。つねに時代を先取りしてこられた。先生が日本での産業社会学の体系を確定し、膨大な「九十九里浜調査」の英文報告書を完成された年齢に、私もいつしかたどりついてしまった。

先生は、いつまでも、私にとってつねに先生であり続けている。

米山桂三先生を偲ぶ

川合隆男

一九七九年晩秋、米山桂三先生はここ数年に及ぶ闘病と御家族の懸命な看病にもかかわらずついに御逝去なされてしまった。二十数年にわたって直接声咳に接し、あの元気潑剌たる風采の先生のお姿を想い起すとき、晩年の病床での痛ましさとこうしてにわかにお別れする結果が来ようとは今だに信じることができない。昨年中は身近に学友・同僚の市川統洋さんが突然に逝き、恩師米山桂三先生、また有賀喜左衛門先生を喪ってしまい、わたくしなりにさまざまの思い出が去来彷彿し洵に感慨無量である。

米山先生の長年にわたる御研究や学問についてじっくり考え触れてみることの出来る日がいつの日か来るかもしれない。いま不肖の弟子、ものぐさな愚生の身なりに、たとえ断片的で私的な追憶であっても感じるままにそのいくつかを記しておきたい。この点でわたくしにとって特に印象深いのは、(i)先生の旺盛な研究意欲・広範な研究領域・先駆的諸研究、(ii)「変動期・

変革期」における学問営為についての鋭敏な認識、(iii)総合的科学としての社会学の視座という諸点である。先生の著書自体は必ずしも多いとはいえないかもしれない（主要著作目録は『米山桂三先生還暦記念論文集・日本社会と近代化』一九六七年、「米山桂三教授退職記念論文集」『法学研究』一九七二年三月号の、いずれも巻末にある）。だが、先生の長年の研究活動においてその広範な研究関心・領域、柔軟で極めて旺盛な研究心は驚嘆に値する。確かに先生の研究活動は政治心理学と産業社会学の領域を中心としていたが、政治心理と世論・報道、産業・労働・経営・工場、広告、孤島・都市・漁村、原爆被災、医療・看護、人種等々に関してそれぞれ先駆的な研究を試みてこられた。

こうした広範な研究関心は、その幾分かは先生の性来のディレッタント趣向もあるかもしれないが、変動期・変革期における学問営為ということについての自覚的あるいは極めて直観的認識・把握によつて支えられていたのではないだろうか。しばしば先生が言及されておられた「生からの形式」やマンハイムの知識社会学、歴史社会学への共鳴にもあつた如く、現代国家や現代社会の不安と危機、非合理性を繊細鋭敏な感覚でとらえ、自らをそこに徹底せしめて「……『人間らしく生きる』ための存在形式」を求めて「われわれにその解答を迫っていると感じられた諸問題に片つ端から取組」（「社会学における概念化と体系化」一九七〇年論文、傍点筆者）まれたのであつた。更に、先生の研究活動のもう一つの特徴は、人間事象・社会現象についての総合的視座の重視、「総合的科学」としての社会学の位置づけである。基点としては社会生活の基礎を個人に求めつつ方法的個人主義の立場から社会行為と相互作用、社会的状況、社会変動と文化を基軸として一般理論社会学・特殊社会学・応用社会学とが相互にフィード・バックしていく総合的科学としての一般社会学の視座を用意してその理論的再構築を絶えず試み続けようとする姿勢があつた。自らも多くの調査を試みられ理論と実証・社会調査との統合に強い関心を示されて、わたくし自身学生の頃からフィールドに足をつけることの大切さを聞かされてきた。

もちろん、さまざまの批判も提起され得ようが、わが国の社会学界において近代日本社会学が単なる紹介や翻訳に終始する学問動向から抜け出して実証的な社会科学へと歩む過程、またその歩みの中で研究領域を新たに先駆的に切り開く過程で米山先生が確実に残された足跡・功績は極めて大きい。その道標は明らかである。いま万感の思いの中で顧みると、わたくし自身が自ら学ぶことを求め、考え、また説いてきたにもかかわらず、先生からどれだけのことを学んできたのかをあらためて考え直してみると、何か打ち拉がれ愕然とせざるを得ない。

先生に初めてお目にかかったのはわたくしが学部三年に進級したばかりの一九五九年（昭和三四年）四月であつた。今考えると不思議な位に当時悩みに悩み、悩みにひたり切り、あるいはよくも悩みを楽しみ続けていたと思える程に、「自分の生い立ちや家族、父、宿命」とか、「人間の現実性と根源性」とか、『「如何に生きるか』を生きる」とか、「こころよく働く仕事あれ、それを仕遂げて死なんと思う」とか、「人間の生活と学問、政治」とかを極めて身近に極めて茫漠と悩み続けていた。生涯にわたる学問としての社会学を志すことになろうとは夢にも思つていなかつたが、父や生活環境との自らの葛藤の中でぼんやりと社会学への興味を抱き初めデュルケムやウェーバー、ルカーチなどの翻訳・紹介書を読んだり、農村の生活（農村社会学）や中小零細企業の産業組織・生活（産業社会学）などに具体的な関心を示し出していた。だが、その時は政治学科に米山桂三先生という社会学者がおられるということは知つていても、まだ日吉の教養課程ではお目にかかつたこともなかつたし先生の著書や論文も何も読んでいなかつた。日吉でのゼミ説明会には米山先生はおいでにならず生田正輝先生が米山先生の分も代理してご一緒に説明紹介して下さつたと記憶している。学部三年になつていよいよ社会学の米山先生のゼミを希望することに意を決して授業開始早々同志の友人と二人して大胆にも旧第二研究室に先生をお訪ねしたのだつた。不敵にも失礼してお訪ねしようとしていることへの躊躇、新しい扉への不安と期待とが複雑に交錯する思いで研究室のうす暗い廊下をつたい先生の研究室の前に立つたのだった。大学に入つて研究室の個室に教授を訪ねるということも始めてであつた。米山先生はわたくしらの主旨をきいて「率先してやつてきたのはとてもよい」といわれて氏名と研究テーマを書けという次第でいともあつさりと入ゼミを認めて下さつた。この時が先生との最初の出会いであり一学生の意向を率直にきいて下さつた感激と奇妙な親しみでわくわくして研究室を出てきた日のことを、わたくしなりに学問を志し始めた日々のことを今は幻のように想い起すのである。

以来二〇年余米山先生の御指導を受けて育てられてきたが、この間わたくしは何をなし得たのか、先生の学恩にどれだけ応え得たのだろうか。動乱怒濤の渦中を生き続けたひとりの人間の生きざまと絶えず求め続けた学問営為の姿に敬服し、その姿いまはなきことを思うと、わたくしにとつてはことのほか「巨星落つ」の感が深い。先生には日常雑談の中にも時には嫌になるほどの冗舌、皮肉、毒舌罵倒もあつたが、どこか瓢々とした風貌、照れくさそうなしぐさ、軽快なユーモア、優しい心遣いと眼ざしなど、いまは不思議と懐しく想い起すのみである。謹んで米山桂三先生を偲び御冥福を祈念しつつ筆を擱く。